李 孝徳先生にきく

「自分」と「世界」を見直すための三冊

聞き手　伊藤千尋（外国語学部ドイツ語専攻四年）

――学生におすすめいただいた三冊のうち、まずこの一冊目を選ばれた理由をお聞かせください。

ひこ・田中『ふしぎなふしぎな子どもの物語――なぜ成長を描かなくなったのか？』（光文社新書）は、アニメ、児童文学、特撮もの、ゲームなどを題材としながら、現代社会や世界をどう捉えるかを非常に面白く論じたものです。著者は、もともと児童文学作家なのですが、優れた批評家でもあって、その主張にはとても説得力があります。アニメやゲームといってバカにせず、子どもたちがなぜあれほどまでに熱中するのかを物語の構造と歴史性から分析し、そこから見事な現代社会論を展開しているんです。

少し前まで子ども向けの物語の多くは、子どもが大人になっていく成長譚でした。けれどもいつしかアニメは成長物語を描かなくなり、子どもだけの世界に閉じていく。それを今日的な問題として論じています。ジェンダーの観点なども絡めて論じられていてとても面白い。

たとえば、なぜ「アルプスの少女ハイジ」はアルムの森で服を脱ぐのか――。これには当時のドイツやスイスの社会状況が色濃く反映されています。当時、近代化がどんどん進んでいくなかで「自然」に回帰しなければならないという風潮が広がりました。そうした世相のなかで描かれたハイジは、都会から山に来ると服を脱ぎ、自然児に返るわけです。それからハイジのおじいさんは人殺しだと村人から噂されているのですが、ここにはスイスが傭兵を送り出してきた国であったという歴史が描かれているんです。

日常的な娯楽表現のなかにも色濃く反映されている社会性や時代性について感受性を持つこと。そして日頃から知的な関心をもち、自分の生きる社会をきちんと理解してほしいと思い、この本を選びました。

――二冊目のオリバー・サックス『手話の世界へ』（佐野正信訳、晶文社）は先ほどの本とは趣きが違いますね。

私は授業で必ずろう文化を扱います。実は手話も、日本語や英語のような「母語」としてあるのです。つまり、生まれてから一定の期間を過ぎてしまうと外国語としてしか身につけられないのです。手話の言語世界は非常にユニークで面白いものです。外大の「音声言語中心主義」教育を相対化するために、ぜひこの本は読んでもらいたいですね。

ちなみに、日本の手話には日本手話と日本語対応手話があります。私たちが目にする「手話ニュース」にはその二種類が混在します。ですから日本手話ネイティヴのろう者には理解できなかったりする。そこには、日本手話を音声日本語へ翻訳して作った日本語対応手話を規範とし、ろう者に押しつけてきた歴史があるのです。この本は、言語を通して「他者」について学ぶ格好の題材です。言語学的なアプローチとしても非常に興味深い上に、サックスの文章がとても魅力的なので、とても素敵な本になっています。

――三冊目のおすすめの理由は？

『私という旅――ジェンダーとレイシズムを超えて』（青土社）は、在日朝鮮人の鄭暎恵（チョン・ヨンヘ）とフィリピン人のリサ・ゴウという二人の女性の在日経験が元になっていて、日本における階級、人種、ジェンダーの問題が扱われています。

フィリピン人女性というだけで、セックスワーカーとみられてしまうという話が出てきます。実際にはフィリピンから来る人々の教育レベルは高いのですが、無教養とみなされてしまう。「イメージ」がいかに差別的に作り上げられるか、またエスニシティやジェンダーといった問題が、いかに階級と結びつくのかなど、アジア系の女性である彼女らだからこそ見える日本社会の問題が鋭く分析され、批判されています。日本はよく差別に対する感度が低いと言われますが、この本は、そのことを考えるのにとても良い導きの糸になるものですね。

最後にお伝えしたいのだけれど、今回私にしていただいたインタビューというものは、やるととても勉強になります。自分を歴史的に対象化し、経験をエンリッチすることができるのですね。ご両親やご祖父母に、ぜひインタビューしてみてください。単純に話を聞くだけでなく、たとえばベトナム戦争や沖縄復帰などの歴史的事件をポイントにして聞くと、「歴史」が単なる事実であることをこえて、生き生きとした物語であることを感得できるはずです。

り・たかのり／イ・ヒョドク　総合国際学研究院教授　表象文化論・ポストコロニアル研究